

# 対話による運動技能の向上を楽しむことができる児童の育成

## —対話が進む指導の工夫—

特別研修員 体育 小澤康通（小学校教諭）

### 児童の実態

○対話を通して運動課題を解決したり、運動技能を向上させたりする経験の不足。

### 新学習指導要領

○自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し、判断するとともに、他者に伝える力を養う。

### 対話が進む指導の工夫

#### 手立て1 対話的な取組を促す「めあて」の設定

- ・友達とアドバイスし合って、跳び箱運動の動きを大きくするというめあてを設定する。
- ・助走から着地までの動きの中から、大きくする動きと、大きくするためのコツを考える。
- ・どの動きを大きくするか考えるツールとして、助走から着地までの各局面の絵を表示したワークシートを活用する。
- ・大きくしたい動きを友達に伝えて、見てもらい、対話を通して自分の動きを確認する。

#### 手立て2 グループ学習による教え合い活動の導入

- ・跳躍する児童、見る児童の役割が明確になり、友達の運動技能の変容に気付きやすくなる。
- ・技能習熟の異なる児童3～4人で構成されたグループを編制する。
- ・どの動きを大きくしたら良いかわからない時は、グループの友達と相談する。
- ・動きを大きくするコツは何か、グループの友達と見合い、気付いたことを教え合う。

### 成果

※（授業前の人数→授業後の人数）

- ・動きが大きくなったか友達に聞いて確認することで、自然とアドバイスし合う状況が生まれ、技能の向上に結びついた。（開脚跳び 22人→30人、台上前転 10人→28人、かかえ込み跳び 10人→17人）
- ・グループ学習による教え合い活動では、できない理由となる動きを指摘したり、やって見せたりするなど、熱心に教え合うことができた。
- ・授業後のアンケートで、跳び箱運動が楽しいと答えた児童が増え（15人→26人）、楽しくないと答えた児童はいなくなった（6人→0人）。理由も「アドバイスし合って楽しいから」と記述していた。

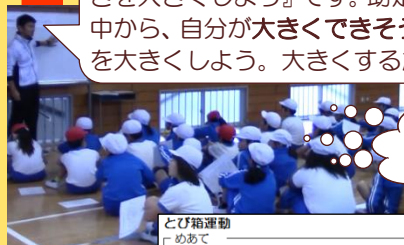
### 課題

- ・児童の教え合い活動で大きくしたい動きに応じた場の工夫ができない時は、教師が発表・実演の場面で、場の工夫を紹介する必要があった。教え合い活動を導入した授業では、児童の実態や活動状況に応じて、教師がどのタイミングでどのような支援をすることが学習成果を高めるために効果的か、研究を深める必要がある。

### 実践授業（跳び箱運動）

#### めあての把握・課題追究の見通し

めあては『友達とアドバイスし合って、開脚とびの動きを大きくしよう』です。助走から着地までの動きの中から、自分が大きくできそうな動きを決めて、動きを大きくしよう。大きくするためのコツも考えよう。



大きくする動きを自分で決めるのかあ。

ワークシート



#### 課題追究1

どの動きが大きくできるかな？



跳び箱の奥に手を着くといいよ。

僕は着手の時、足を大きく開くことにしたよ。

足を広げる！



どうだった？

さっきより大きく広げてたよ。

#### 発表・実演（大きくできる動き・コツの共有）

S1：僕の大きくする動きは、空中①で高く跳ぶで、コツは踏み切りで思い切り体重を乗せて跳ぶです。

S2：僕の大きくする動きは、空中②で足を大きく広げるで、コツは助走のスピードを速くするです。

S3：私の大きくする動きは、空中②で膝を伸ばすで、コツは思い切り踏み切ります。



#### 課題追究2

※空中①は第一空中局面、空中②は第二空中局面を指す。



S1君の動きに挑戦してみよう。思い切り踏み切って空中①で高く跳ぶぞ！

#### まとめ

技を大きくすることは発展技へつながります。空中①で高く跳べるとかかえ込み跳びにつながります。また、空中①で腰が高くないように抑え、着手後に胸を張り、手を広げると開脚伸身跳びにつながります。